

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01253

研究課題名(和文) 複統合的言語の語形成と情報構造に関する研究 抱合と語彙的接辞の比較対照を通して

研究課題名(英文) A study of word formation and information structure in polysynthetic languages, especially through comparison of incorporation and lexical affixes

研究代表者

渡辺 己 (Watanabe, Honore)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：30304570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,900,000円

研究成果の概要(和文)：北アジアで話されているチュクチ語(チュクチ・カムチャッカ語族)と北アメリカで話されているセイリッシュ語族の言語(なかでもスライアモン語, リルエット語, ハルコメレム語)の語形成のうち, 特に前者に見られる抱合と後者に見られる語彙的接尾辞について比較対照をおこなったところ, 類似点も多いが, チュクチ語の抱合では, 道具や場所を表す名詞も抱合で表しうるのに対し, セイリッシュ語族ではそのような名詞項を語彙的接尾辞で表すことはできないという, 非常に顕著な違いがあることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で対象としたチュクチ語とセイリッシュ語族の言語は, いずれもいわゆる少数の話者によって話されている言語であるが, 一語(特に述部)に多くの概念を盛り込みうるタイプの言語である。機能的には似ていると言われていた抱合と語彙的接尾辞という語形成手段を比較対照することによって, 自然言語において, どのように語を作るか, そして, 系統が異なる言語において, それがどのような類似を見せるか, 相違があるかを精査していくことによって, 人間の言語というものの理解に近づくことができたと考えられる。特にこれらの言語の研究者は世界的に非常に少ないこともあり, 国際的な貢献度も高いと言える。

研究成果の概要(英文)：By comparing the process of noun incorporation in the Northern Asia language, Chukchi and the use of lexical suffixes in the North American language, Salish, similarities in their functions were confirmed; however, a prominent difference was also found. For example, nouns denoting instrument or location can be expressed by incorporation in Chukchi, but in Salish, such notions cannot be expressed with lexical suffixes.

研究分野：言語学

キーワード：言語学 形態論 チュクチ語 セイリッシュ語

1. 研究開始当初の背景

本研究で研究対象とした言語は、北アメリカのセイリッシュ語族のスライアモン語、ハルコメレム語、リルエット語、そして北アジアのチュクチ・カムチャッカ語族のチュクチ語である。セイリッシュ語族は 23 の言語からなり、北アメリカ北西海岸領域（より具体的には現在のカナダ・バンクーバーとアメリカ合衆国・シアトルを中心とした地域）に分布する。一方のチュクチ・カムチャッカ語族は 5 つの言語からなり、シベリア北東端に分布する。いずれの言語もいわゆる複統合的言語であり、特に動詞述部に主語および目的語標識や、テンス・アスペクトなどを形態的に付加し、より分析的な言語であれば何語も使って表現する内容を、一語の中に盛り込みうる言語である。しかし、その複統合的性質を担保する語形成は一様ではない。チュクチ・カムチャッカ語族の言語には、「抱合」という現象が見られる。抱合は、動詞語幹に名詞語幹や副詞語幹が付く語幹複合（合成）によって、新たな語幹を形成する形態的手法である。抱合では、基本的に自立的にそれのみで現れうる語幹と語幹を付ける。一方で、セイリッシュ語族の言語には、「語彙的接尾辞」と呼ばれる接辞がある。それらは接辞（すなわち決して単独では用いられない非自立的な付属形式）でありながら、具体的な語彙的意味を持つ。そのほとんどは名詞的と言って良い意味である。例えば、スライアモン語を例にとると、およそ 80 程度の語彙的接辞がある。意味的にはそのおよそ半数が身体部位を指すものであり（頭、鼻、口の外側、口の内側、喉、首、目、指、膝など）、残りの半数には自然物・自然現象（水、風、地面、岩、雲・天気など）や人工物（家、屋根、毛布、服）などが含まれる。これほどに具体的な名詞的意味を持つ形態素が、形式的には接辞であり、単独で使える語ではないことは興味深い。さらに大きな特徴は、語彙的接辞と同じ意味を表す自立語が異なる形式で存在することである。すなわち、このように形式的に異なることから、語彙的接辞が語幹に付いた形式は語幹複合ではなく、したがって抱合とは言えない。語彙的接辞は、セイリッシュ語族のすべての言語に見られ、セイリッシュ祖語に再構できるもので、非常に古いものだと考えられている。

このように、抱合と語彙的接辞という手法は、前者は自立的な語幹を複合したもの、後者は自立性のない接辞を語幹に付加するものであり、形式的に異なる手法である。抱合の現象は、チュクチ・カムチャッカ語族に限られたものではなく、北アメリカも含む他の地域でも見られる。一方で、語彙的接辞を持つ言語は比較的少なく、セイリッシュ語族およびその周辺の語族（ワカシ語族、チマクム語族など）に限られている。語彙的接辞の機能を説明する際に、抱合と類似しているという文言がよく使われる（例、M. Mithun, 1999, *The languages of Native North America*, Cambridge Univ. Press.）。抱合と語彙的接辞の機能として、まず最初に言われるのが、談話内での情報を操作する機能である。同じ内容を述べる時に、自立語を使った場合では、その自立語が特定のものに指すことが多い。一方で、抱合と語彙的接辞が使われた場合、抱合された名詞や語彙的接辞が指す対象は背景化され、不特定であったり、一般化されたものである。この点だけをとれば、確かに抱合と語彙的接辞の機能は類似している。しかし、従来の説明はこの程度で終わったままである。実際に、細部においても類似しているのだろうか？異なるとしたら、どういう点が異なるのだろうか？これが本研究を動機づける学術的「問い」であった。

2. 研究の目的

機能が類似していると言われる抱合と語彙的接辞であるが、実際に、抱合を有する言語と、語彙的接辞を有する言語を直接比較対照して検討した研究はない。そこで本研究では、実際に長年、そのような言語を専門とし、現地調査をおこなってきた複数の研究者で、互いのデータを突き合わせながら、抱合と語彙的接辞について比較検討をおこない、そこにどのような類似点と相違点があるのかを精査することを目的とする。本研究は、参加者それぞれみずから現地調査によって収集した一次データに基づいて進める点にも大きな特色がある。本研究が対象とする言語は、どれもいわゆる少数言語であり、話者が非常に限られており、消滅の危機に瀕しているいわゆる危機言語である。

3. 研究の方法

本研究では、チュクチ語の抱合と、セイリッシュ語族に見る語彙的接辞について、それぞれと系統が同じ言語についても文献を参考に、どのような例があるか、その機能はどのようなものかを整理することから始めた。まず形式面から、チュクチ語でどのような名詞が抱合されるのか、非常に生産的とはいえ、そこには制限がないのかなどを観察した。セイリッシュ語族の言語については、語彙的接辞を網羅的に概観し、どのようなものがあるのか、そしてどのような用法があるのか整理を進めた。（セイリッシュ語族の内部でも、言語によって語彙的接辞の数や種類が異なるためである。）それを踏まえ、両語族に見られる抱合と語彙的接辞の比較対照を、まずは談

話中の機能を除いておこなった。

より具体的には、まず、抱合と語彙的接辞が指示対象とする名詞の節の中の役割を見た。抱合されやすい名詞は他動詞目的語(被動者)だと言われる。セイリッシュ語族に見る語彙的接辞も、他動詞目的語にあたる指示対象が語彙的接辞によって動詞語幹に取り込まれることが多い。そこで、その他の役割を持つ名詞がどの程度抱合されるか、語彙的接辞で表されるかを調べ、このような形式面からの比較対照をおこなった。次に、抱合される名詞と、語彙的接辞で表される指示対象の意味的範疇についても調べた。語彙的接辞はその半数が身体部位を指すものである。抱合にはそのような傾向があるようには見えないが、細部は本研究において比較対照をおこなうことによって考察を進めた。抱合も語彙的接辞も、談話の中で情報を操作する点が顕著である。そのため、この点を研究するには、談話資料(原語テキスト、以下テキスト)が不可欠である。そこで、本研究参加者の3名は、それぞれが対象とする言語について、現地調査にてテキスト収集をする必要があった。

本研究の立案段階では、以上のような進め方を考え、まだまだ不足している言語資料を代表者および分担者のそれぞれがカナダおよびロシアで現地調査して収集する予定を組んでいた。ところが本研究期間の大半は、新型コロナ・ウイルスによる未曾有の世界的パンデミックと重なってしまい、海外へ渡航して現地調査をおこなうことがまったく不可能となってしまった。現地とのビデオ通話などを通じた調査も考えたものの、相手国の通信状況や時差の問題もあり、さらに言語資料を得るための高品質の録音と繊細な聞き取り調査をすることは不可能であった。そのうえ、ロシアによるウクライナ侵攻も起こり、パンデミックが落ち着いてきたかと思われた時期も、ロシアへの渡航ができなくなった。この戦争状態は当初は数週間で終わる予想であったが、一向に終わらず、現地調査のための渡航ができなかった。現地調査による一次資料の収集と、それに基づいた研究を進めることが本研究の大きな柱であったため、この予想外の状況は大きな痛手であった。したがって、研究は本研究参加者が過去にすでに収集していた資料と、手に入りうる文献資料から進めることが主となった。

4. 研究成果

チュクチ語および系統を同じくするコリヤーク語などと、セイリッシュ語族の言語を対照しつつ、前者に多用される抱合と、後者の語彙的接尾辞について考察を進めたところ、従来から指摘されてきたように、その機能的側面の類似はたしかに見られるが、相違点も多いことが分かってきた。

チュクチ語では、ほとんど無制限とも思われるほど、語幹と語幹の複合が自由におこなわれる。これがチュクチ語の語形成の大きな特徴である。一方で、セイリッシュ語族の語彙的接尾辞は、具体的な名詞的意味を持ち、一見するとチュクチ語などの語幹複合と似ている。先行研究では、セイリッシュ語族の語彙的接尾辞の起源は自立語幹の複合であっただろうとされている。ただし、語彙的接尾辞自体、セイリッシュ祖語に再建できるものも多く、同語族の古い時代からのその存在が確認できる。セイリッシュ語族でも言語によっては語幹の複合をおこなう言語もあるが、今回、あらためて調べたところ、複合をおこなえる言語はむしろ少なく、複合がまったくない言語の方が多かった。スライアモン語でも、若干の例外を除いて、語幹の複合はない。

チュクチ語との対照でセイリッシュ語族の語彙的接尾辞に関して明らかになってきたのは、機能的役割の制限である。例えば、チュクチ語では、分析的に表現する場合、斜格として現れるような道具(具格名詞項)や場所(所格名詞項)をも動詞述部に抱合で盛り込みうる。しかし、セイリッシュ語族の言語では、そのような名詞項を語彙的接尾辞で動詞述部に入れることはほぼ不可能のようである。スライアモン語では、<水をかける-手-自動詞接辞>という語構成で、「手で水をかける」という例があるが、このような例は他にない。セイリッシュ語族の他の言語で同様の例を探しても、わずかに2、3例が見つかったのみである。チュクチ語では、その動詞述部の行為などがおこなわれた場所を表す名詞が抱合によって表されることもあるが、セイリッシュ語族の語彙的接尾辞がそのように使われる例は見つからなかった。本研究の当初の計画では、スライアモン語、リルエット語、ハルコメレム語の3つのセイリッシュ語族の言語について、現地調査をおこない、調査者の方から、語彙的接尾辞が道具や場所を表すような述部を作例し、その文法容認度を話者と確認することも考えていたが、未曾有の世界的パンデミックのために、現地調査が思うようにおこなえず、この点について新たなデータを集められなかったのは残念であったが、今後もこの研究を続けたいと考えている。さらに、原語テキストの収集を進める予定であったが、これも現地調査ができず、おこなうことができなかった。自然談話の中で、抱合や語彙的接尾辞がどのように現れ、そこにどのような類似点と相違点があるかについては、今後の課題としたい。

より大きな問題も浮き彫りになってきた。それは、セイリッシュ語族の語彙的接尾辞は、そもそも接辞として扱うべきか、語根(あるいは語幹)として扱うべきかという点である。セイリッシュ語族の言語は、若干の接頭辞および語根の前に付加される重複部以外を除くと、語根が必ず

語の先頭に現れる。それ以降に付加されるものは、一律、接尾辞として分析される。そのため、文法的ではなく、語彙的な意味を持つ語彙的接尾辞も接尾辞とされてきた。これらを拘束語根として考えることも、あるいは可能かもしれない。そうすると、チュクチ語などの抱合と、より類似性の高い手法だと言えるかもしれない。ただし、これらを拘束語根とすると、それだけが語の先頭には決して現れず、必ず他の語根に後続しないと現れない形態素群となる。何を根拠に、接辞ではなく拘束語根だと分析しうるかという点、それは意味的な基準にならざるを得ない。すなわち、例えば、他動詞形成接辞や、目的語人称標識などの文法的機能を持つ接辞とは違い、「頭、口、家」などの具体的意味を持つものは拘束語根であるとするようになる。しかし、言うまでもなく、意味に頼った言語分析はアドホックになってしまい、避けるべきである。この問題は、そもそも、「接辞」とは何か、という言語分析における根本的な問題に通じるものであり、今後もより多くの言語の事例を考察して、分析を深めていくべきものであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Watanabe, Honore	4. 巻 15
2. 論文標題 A Sliammon Text: “ First Pregnancy ” , as Told by Mary George	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Asian and African Languages and Linguistics	6. 最初と最後の頁 93-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/99898	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 呉人徳司	4. 巻 5
2. 論文標題 ロシア、モンゴル国、中国に居住するブリヤート人とその言語	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代中国の言語政策と言語継承	6. 最初と最後の頁 127-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Watanabe, Honore	4. 巻 10
2. 論文標題 A Sliammon Text: ‘ When Coming Out of the Woods, ’ as told by Mary George	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Northern Language Studies	6. 最初と最後の頁 275-294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Watanabe, Honore	4. 巻 17
2. 論文標題 Making Dugout Canoes: A Sliammon Text Told by Agnes McGee	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Asian and African Languages and Linguistics	6. 最初と最後の頁 89-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/122477	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Watanabe, Honore	4. 巻 16
2. 論文標題 A Sliammon Text: 'Blackfish,' as Told by Mary George.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asian and African Languages and Linguistics	6. 最初と最後の頁 309-328
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/117167	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Kurebito, Tokusu
2. 発表標題 Current Status of Indigenous Languages in the Siberia, Russia: Focusing on Chukchi
3. 学会等名 The 3rd International Symposium on Language Resources and Intelligence, International conference, Beijing Advanced Innovation Center for Language Resources, Beijing Language and Culture University (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kurebito, Tokusu
2. 発表標題 'Language Technologies for Chukchi: Developing Keyboard Drivers Based on Documentation Materials
3. 学会等名 International Conference on Preservation of Languages and Development of Linguistic Diversity in Cyberspace: Context, Politics, Practices, Russian UNESCO IFAP Committee, Yakutia City, Russia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kurebito, Tokusu
2. 発表標題 , ' (What can we do to protect the indigenous languages of Siberia: working with the Chukchi)
3. 学会等名 International Conference on Indigenous Languages and Cultures in the Siberian Region of Russia, The Siberian Branch of the Russian Academy of Sciences, Yakutia City, Russia (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Kurebito, Tokusu; Badagarov, Jargal	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 492
3. 書名 language) (A reverse dictionary of the Buryad	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	清澤 香 (Kiyosawa Kaoru) (30758793)	公立諏訪東京理科大学・共通・マネジメント教育センター・准教授 (23604)	
研究分担者	呉人 徳司 (Tokusu Kurebito) (40302898)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授 (12603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------